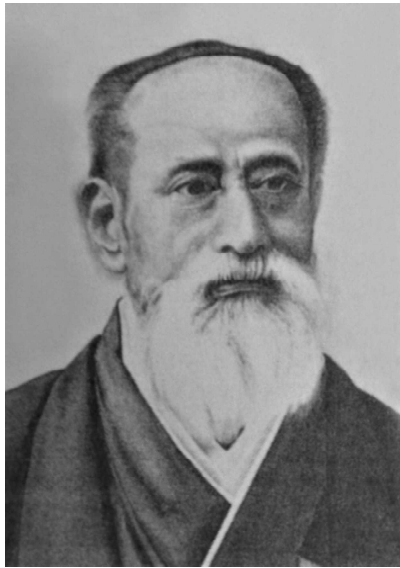


いな ば さん え も ん

稲葉三右衛門

四日市発展の慧眼の士

— 四日市港を築いた廻船問屋 —



稲葉三右衛門 (1837 ~ 1914)
出典：『四日市港開港百年史』

稲葉三右衛門(1837-1914)は、美濃国高須町(岐阜市)で吉田家の六男に生まれた。四日市の中納屋町廻船問屋稲葉家を継ぎ、六代目三右衛門を襲名。1868(明治元)年太政官会計局御用掛に任じられ、同年領商方となる。1870年総年寄を命じられ、1871年戸長となり、1873年船改上取締兼務を命じられた。稲葉は「四日市は港を開くことによって将来発展する」との信念を持った。また四日市に鉄道を敷設し、中部経済圏の発展を考えていた。

■ 四日市港発展の兆し

四日市港は波静か水深に恵まれ、天然の良港であり、伊勢湾内沿岸航路の焦点となっていた。和船問屋には稲葉三右衛門、田中武右衛門らの3店があり、旅客や貨物集散に当たっていた。1870(明治3)年10月、当地の先覚者3人は東京の回漕会社と特約し、「四日市～東京」間に初めて汽船を運航させた。汽船航路の開通は、四日市港の発展に变革をもたし、出船入船は盛況を極めた。

■ 四日市旧港修築の動き

ところが1854(嘉永7)年6月と11月の大地震で、四日市は未曾有の被害を被った。四日市港は汽船の入港に支障を、土砂が港口をふさぎ小船の出入にも不便をきたした。港の窮状を見かねた稲葉三右衛門は、同業田中武右衛門の連名で「当港波止場建築灯明台再興の御願」を1872(明治5)年11月13日三重県庁に提出した。即日快諾を得られた。主な計画は①今の高砂町と稲場町の西半と海面下の払下。②これを埋立し掘割を設ける。③長さ120間の直線の波止場を築く。④長さ150間の土堤防を設ける。⑤燈明台を再興する。⑥工事費は自費とする。であった。1873年3月、修築工事は開始され、同年9月に開墾地と滞筋掘削など大半完成した。田中は資金調達不能で辞退した。稲葉は落胆したがくじけず、戸長の職を辞して事業に没頭した。同年12月には、波止場・灯台の建設と浚渫を除き、埋立はほぼ完成に近かった。その後資金難で工事は中断した。県は個人の努力の限界と判断、県の事業として埋立地は完成させた。1875年5月、県は埋立地に稲葉夫妻にちなみ、稲葉・高砂町と命名した。

■ 稲葉の執念により港修築工事は完成

その後工事の全工程未完了のため処分保留となる。稲葉は事業の継続を県に申しれたが許可されなかった。訴訟を起こし裁判所で「どうしても自分の手で港の修築を完成したい」と訴えたが、敗訴に終る。画策した結果1881(明治14)年3月、波止場完成時は公有にする条件で工事の認可を得た。資金は三菱会社など融資を受け、1884年に事業は完了した。こうして稲葉三右衛門には莫大な負債が残る。工事は12か年と20万円(今の4億円程)を費やした。稲葉の彰功碑は埠頭に建設。銅像は建設後供出され、国鉄四日市駅前に再建。近代的四日市港の基礎が、ここに築かれた。修築後の大暴風雨で港は壊滅され県費で修復した。旧港で稲葉町先防波堤は、湾曲の形態でなく直線式(右図)で、高砂町地先の突堤は現存しない。



旧港修築工事 出典：『四日市港開港百年史』



明治初期の港の図面 出典：『四日市市史第13巻』